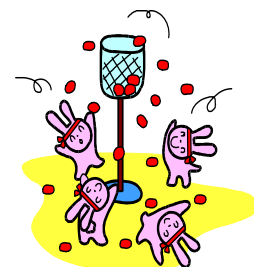


TNB58だより



平成 26 年 9 月号

2 学期が始まりました。秋は食欲の秋、スポーツの秋であり、読書の秋でもあります。最も過ごしやすい季節の中で、子どもたちは美味しいものを食べ、スポーツに親しみながら心身ともに大きく成長していきます。また、落ち着いた環境で学習に取り組み、学力面でも力をつけていく季節です。そして、その効果を一層高めるためには、学校だけでなく、家庭との連携の中で学習習慣を定着させる取り組みが必要となってきます。新潟県の燕市では、小学校では集中力や学習意欲の向上を目指し、中学校では授業の振り返りと家庭学習の接続を図るために毎日 10 分から 15 分間を「長善タイム」として教育課程に位置付けています。

中学校の「長善タイム」の取り組み例

①その日のノートや教科書を見直し、分からなかったところの整理



②自主学習ノートへ家庭学習の計画を記入

記入内容：④家庭学習の時間帯 ⑤自主学習の内容 ⑥宿題の確認



③自主学習開始（疑問点の整理）



④「長善タイム」で立案した計画をもとに家庭学習

成果 ①自主学習ノートの提出率が毎日ほぼ 100%

②毎日家庭学習ができたと回答した生徒 88%

③家庭学習に見通しを立てて取り組んだと回答した生徒 87%

それぞれの学校で、それぞれの先生が学習効果を上げる取り組みをされていることと思いますが、今回から 3 回にわたり、算数、国語、理科についてスーパーティーチャーからの助言を掲載しますので、参考にしていただきたいと思います。

算数が好きな子を育てるために

分からない子の気持ちが汲み取れる授業を

一番大切にしたいことは、分からない子・できない子の思いを汲み取れる授業を行うことです。大人である教師は、指導内容を伝えることが中心となって、子どもの気持ちを考えずに次々と授業を進めていくことがあります。そんな時、先生がよく使う言葉に「分かりましたか。」があります。先生がそう問いかけるとほとんどの場合子ども達は「はい。」と答えます。その答えを鵜呑みにして単元を終えて、確認テストの結果を見た時、「どうして？」と自分の指導や子ども達の学び方を反省することがよくあります。

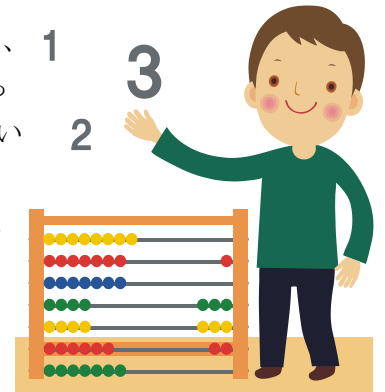
$$\begin{array}{r} 12 \\ \times 34 \\ \hline 408 \end{array}$$



マイナス評価は禁物

私の経験からも言えることですが、他の人から言われたことは心に残り、自分でもそのように思い込むことがあります。算数で言うと、「こんな簡単なこともできないのか。」「あかんなあ。」などが先生からのマイナス評価の言葉です。この言葉で自信を失い、算数は嫌いだという意識を植え付けてしまいます。マイナス評価の言葉は厳禁です。

まず、目の前の子どもをプラス思考で見守りましょう。よく言われていますが「間違いは学級の宝物」なのです。先生の基本姿勢として、間違いや分からないことを否定せずに、悩んでいるその子の立場に立って一緒に考える意識を持ちましょう。



算数にも体験活動が有効

単元の導入では子どもの興味関心を引きつける工夫をしたいものです。その時、体験的な学習が有効です。子どもが自分の身体を動かしてやったことはよく覚えています。また、友達がやっていたことも覚えています。比較するとき（足したり引いたり）の必要性も容易に持たすことができます。授業時間のめあてを提示するときにも使えますし、単元全体の見通しを持たせるときにも役に立つと思います。

学習のめあての提示と算数用語

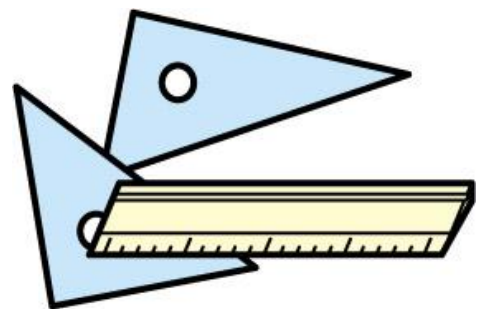
各授業時間に提示する学習のめあてと指導後のまとめとはつながっているように心がけましょう。つまり、めあて・指導・評価の一体化を常々意識して実践するように自分を高めていきたいものです。授業における算数科の言語活動には、算数用語を使えることが求められています。指導者である先生は、堅苦しいかもしれませんが意識して既習の算数用語を使うようにし、算数の言語環境を整えるようにしましょう。

指導の流れのパターン化

毎時間の指導の流れは、例題提示→めあて・見通しの提示→個人思考→集団思考→練習問題→確認問題→振り返りとなっていることが一般的です。領域や指導内容によって、集団思考に時間を割いたり、練習問題に時間を増やしたりして指導に弾力性を持たせることもあります。子どもが主体的に学ぶための算数的活動を取り入れることが大切です。

ねらいと指導が見える板書計画

最後に、板書の必要性です。授業の骨になる「めあて」から「まとめ（振り返り）」へと一貫性のある指導を行い、指導内容にぶれをなくするためにも板書計画を予め持つておくことが大事です。授業の最終目的地がはっきりと分かっているならば、途中で子どもの疑問に時間を費やしても脱線したままで終わることはありません。また、1時間の授業は板書を見れば、一目で内容や重要な事項などが分かります。算数の時間は、ほとんど毎日ありますから毎回板書計画を立てるのは大変なことだとは思いますが、計画を立てた用紙の中にねらいや指導内容が凝縮されていると考えると必要なことだと思えます。



とにかく、子どもに自信を持たせることが算数好きを育てることにつながります。どんな小さなことでも「できた」ことを一緒に喜び、ほめる言葉を投げかけることを忘れないようにしましょう。児童数の減少や少人数授業できめ細やかな指導が繰り返されています。その中で子どもの小さな気づきを見逃さず、汲み取れる人間性豊かな先生をめざして日々の実践を重ねてほしいと思います。

(丹波教育事務所 細見善弘スーパーティーチャー)